

第二百九話 決意なき開戦の罪

所謂「海軍の反戦トリオ」と称される山本五十六、米内光政、井上成美に代表されるように、海軍首脳は本心では日米開戦に反対であった。その海軍が、本心とは裏腹に、開戦反対を明言することなく、国策決定の会議では、中途半端な態度をとった。否、本心とは違う「重大な文言」挿入を主張し、あまつさえ、開戦準備を急いだ。

海軍には複雑な事情があったようだ。

1 「対米英戦を辞せず」文言挿入

(1) 第5回御前会議(1941/7/2)決定の「情勢の推移に伴う帝国国策遂行要領」(この要諦は海軍が主張する南方進出と、陸軍が主張する対ソ戦の準備という二正面での作戦展開)の「要綱」2に「・・・帝国は本号目的達成の為対英米戦を辞せず」との文言が挿入されている。この文言は、国策要綱を調整する陸海軍部局長会議で、海軍側が提案したものである。海軍側の提案に陸軍参謀本部も一様に驚いたとされる。

(2) 海軍の強硬態度の真意

海軍が、ソの真意とは裏腹に、対米戦を辞せずとの強硬態度を表明したのは、次のように言われる。海軍は、支那事変を奇貨として、臨時軍事費更には年度予算を獲得して、仮想敵米国に優る制空・制海権を獲得すべく、海軍航空兵力を大増強しており、今更米軍とは戦えないと言えなかったのだと。

2 第6回御前会議(1941/9/6)

御前会議決定の「帝国国策遂行要領」の第1項は、「帝国は自存自衛を全うする為対米(英蘭)戦争を辞せざる決意の下に概ね十月下旬を目途とし戦争準備を完整す」とされた。この際、陸軍は、「対米英蘭戦を決意し」と挿入することを主張したが、海軍が不同意であり、上述の「辞せざる決意の下に」との字句に決着した。

この段階でも、海軍は開戦決意をしていないことに留意する必要がある。然しながら、戦争準備は着々と推進されていた。

3 海軍の戦争準備

帝国海軍は、上記御前会議に先立つ一年前に、海軍首脳部以下の会議で、戦備に関する打合せを行い、対米戦備に本格的乗り出した。海軍は、米国の戦力増強に対応して第一次から第四次の戦備充実を図ってきたが、種々検討の結果、日本の持久力は1年半から2年で、開戦後一年で兵力は10対5になるとの結論があり、米英の全面禁輸を受けた場合、4~5か月以内に南方武力行使を行わなければ戦争遂行が出来なくなるとの結論も得られた。及川海相は、11/15「出師準備を実施する旨」下令した。出師準備は即ち陸軍の動員に匹敵し、謂わば戦争準備である。

4 本音は言わずに海軍は「総理一任」

海軍側は、文書では開戦回避の意向を伝えながら、閣議や大本営政府連絡会議などでは、それを言明せず「首相一任」と責任を近衛に預けた。海軍は、対米戦回避の責任を負わされる事への危惧から斯かる対応に出たと云われる。押し付けられた近衛は政権を投げ出し、東条大将に大命が降下した。

5 海軍は戦えないと云えない情勢であったという。海軍の存在意義、艦隊の士気に影響、陸海の物資争奪に悪影響、表面的にも陸海一致が必要等がその理由とされる。

尚、陸軍側から、海軍は戦えぬと言ってくれないかと依頼されたこともあったとも云う。

* 一旦回り始めた車輪は最早誰にも止められないのか?最高国策の決定にも、理性的合理的な判断が為されないのは何故だ。武人としては戦えないとは言えぬのは解るが、国策決定でも見栄を張るのか?雰囲気流される日本!

(第二百九話 了)

